

政策研究と家族

私たちが、家族に関する研究を始める契機となったのは、一九七〇年代に数多く手がけた経済社会環境の変化に関する調査と研究である。七〇年代に、私たちは全国各地で、公害、自然環境の破壊、都市問題、地域開発、消費生活の変質などの現場をみた。その時々いつも感じたことは、こうした社会現象のもっとも厳しい影響の受け手が、他ならぬ家族ではないか、ということだった。

経済・社会の変化は何によってもたらされているか、その要因はさまざまだが、その中でも私たちが関心を強めたのは、公けの政策が経済・社会に変化をもたらし、その変化が家族を否応なしに巻き込んでいくという側面である。わが国では家族を直接対象とする公的政策が比較的少ない反面、産業政策などが無防備な家族に結果として大きな影響を及ぼしてきたことは疑い余地もない事実である。この面こそ、私たちのような政策研究を主とするシンクタンク

(財)日本総合研究所

(塩田長英)

の研究者は、一度きちんと研究しなければならないことであつた。

一九七八年になって、幸運にも「新しい家族と家庭に関する調査」(経済企画庁の委託)のフレーム作りに参加し、全国的なサンプル調査を実施した。家族に関する考え方に、いまだ歴史的伝統的な影響がかなり残っているわが国でも、少しずつ変化の兆が見えてきたことが分ると、その変化はわが国に特徴的なものか、各国に相当共通性のあるものなのかという点にも関心を強めた。

研究者の一人である塩田が、七九〇八一年にわたってアメリカに研究留学し、アメリカにおける家族の変貌を見聞することで私たちの家族研究の方向は固まった。帰国してから「アメリカの家族構造と機能の変貌」(一九八三年、総合研究開発機構の委託)をまとめ、「現代アメリカの家族問題」(出光書店)として出版した。

これまでの各分野における家族に関する文献を通して、家族の目からみたその国の経済社会のあり様を描く作業を行なったのである。人口学、社会学、文化人類学の文献はもちろんだが、他の諸学の分野からでもできるだけ家族に関する分析や統計を発見し、それらも活用することにした。

私たちは、自分たちの手で新しい調査を手がけるのではなく、既存の多くの業績を家族の視点で分解し統合する作業をし、そのために各界の権威と面談することを試みた。

私たちの研究には、経済学、経営学、歴史学、社会学、法学、政治学といった分野を専攻した研究者が参加し、共同研究自体を「学際的」に行えるよう努力することとした。

引き続き、一九八五年には「ヨーロッパの家族構造と機能」(同前)八六年には「アジアの家族構造と機能」(同前)についての研究をまとめた。この過程で私たちが大きな壁にぶち当たったのは、言語の問題であった。イタリア語、スウェーデン語については専門家のご協力もえて何とかきり抜けたかにもえたが、アジアの言語となるとまったくお手上げとなった。アジアでは七ヶ国を対象としたが、インドネシア、シンガポール、タイ、韓国については辛うじて報告をまとめることができたが、中国、フィリピン、マレーシアについては成果は誠に不十分というほかない。

いま、私たちはこの研究の最後の段階にいる。ラテン、アメリカ諸国とソビエトおよび東ヨーロッパ諸国の家族構造と機能の研究で悪戦苦闘しているところである。本年末には何らかの形で公表されると思うが、その成果はいかなるものとなるうや、まことに心許ない。

各研究結果の構成には若干の相違があるが、ここでは、ヨーロッパの家族構造と機能の研究で用いた構成を紹介しておきたい。

序章 研究概要

第1部 理論と歴史

第1章 家族と家族理論

1 家族、家族観および家族問題

2 家族理論

第2章 ヨーロッパの家族史

1 序

2 産業化、近代化と家族

3 各国別家族史(イギリス、フランス、ドイツ、スウェーデン、イタリア)

付・家族関連年表

第2部 現状分析

第1章 社会的経済的環境

- 1 経済と社会の動向
 - 2 人口動向
 - 第2章 家族形態と婚姻の成立および解消
 - 1 家族形態
 - 2 婚姻の成立と解消
 - 第3章 女性と男性の生き方の変化
 - 1 ライフ・スタイルの変化
 - 2 新しい男女関係
 - 第4章 子供の成長と環境
 - 1 子供の成長
 - 2 子供の環境
 - 3 教育
 - 第5章 福祉と老人の生活
 - 1 社会福祉
 - 2 老人の生活
 - 第6章 家計と労働
 - 1 家庭経済
 - 2 労働
- である。この中でとくに苦しかったのは家族史の部分である。学際的な観点から書く家族史とはそもそも如何なるものか、担当した研究員はそれなりに工夫したのであるが、こ

の部分の構成はまだまだの感が深い。

わが国の家族については、一九八七年末に刊行された「一九九〇年代・日本の課題」（総合研究開発機構編、三省堂）の第二四章に若干ではあるがまとめることができた。

この研究にあたっては一〇〇余人の学者・専門家の方々にデルファイ式のインタヴューをさせていただき貴重なデータをえた。全文の要約が前記の本の一章となったのである。

「家族と家庭」と題するこの章の構成は、海外各国の構成を若干変えている。その構成を列挙すると

- I 家族の形成
 - 1 人口の構造
 - 2 男と女
 - 3 子どもの誕生
 - 4 家庭の形成
- II 家族の過程
 - 1 子育て
 - 2 役割分担
 - 3 安らぎと葛藤
 - 4 ハンディキャップ
 - 5 老化と死
- III 家族の系譜

- 1 家族システム
 - 2 家族と伝統
 - 3 家族のさまざまな行方
- IV 家族の外部環境

- 1 経済活動
- 2 技術進歩
- 3 自然環境
- 4 家族の国際化

一見して明かなことは、前者の構成がどちらかといえは学際的な試みを含んでいるのに対し、後者は社会学的なものとなっている点である。前者の試みを中止したのではなく、後者では、事典全体の構成に合わせたもので、日本の課題の中では家族もまたその一部分として捉えられたためである。

こうした一連の研究の過程で、共同研究の難かしさを改めて思い知らされた。そもそも共同研究とは何なのか、どのようにすれば共同研究といえるのか、私たちは毎回そのことで苦吟し続けた。どのような視点、イデオロギー、フレーム、用語、文体等で統一するのかしないのか、どんな制約条件の下で研究するのか、お互いどこまで主張したり譲歩したりできるのか、責任者や代表者は各研究者の

論文にどのような責任を持ちうるのかあるいは意見を主張できるのか、毎回、夜を徹して議論し口論し葛藤を続けたのであったが、学際的とはかくも辛くみじめなものなのかという思いを各自が持ったことであった。

共同研究を通して、参加者はそれぞれ自分の考えや意見を公表できる機会を持つことも試みた。おそらくこの方法が共同研究から生じる妥協や屈折を克服するよい方法であったろう。

塩田は、日本カナダ学会で「カナダの家族問題」（一九八七年）を報告し、オーストラリアで「家族を通してみた日本の社会」（一九八八年、国際交流基金）の連続講演をした。小林は、「家族病理」（現代のエスプリ、一九八七年）について論じ、白紙と共に「変わる世界の家族」（生活協同組合研究）を連載中である。

公けの政策が家族をどのように変質させてきたか、そこには何も欠陥はなかったのか、また政策の欠落が家族を変質させてはいないかといった視点で各国の家族とそれを取りまく環境を見てみると、経済の力がいかに強く家族を変質させていくかが浮き彫りにされてくる。国境を越えて広がっていく経済活動は、各地の文化、伝統、慣習、風土といったものを焼き尽していく業火のような力を持つ。その

力を吸収し、消化し、耐えているのが、家族であり、耐えきれなくなると家族はその姿を変えていくようだ。研究は困難であるのみならず、深刻な事象を私たちの前につきつけてくるのである。

（共同研究の参加者は、塩田、国府田、富永、山崎、内田、早川、中村、小林、白紙、竹内及び所外の数多くの研究者であった。）

（明海大学・国際経済学）

付記 本稿は本学会より日本総合研究所に執筆依頼したものである。執筆の同研究所前所長塩田長英氏には、紙上を借りて御礼を申し上げる次第である。

（編集事務局）